特275
482
特275
482

日本精神の核心

文學博士　福來友吉

一、選ばれた日本民族

只今御紹介を受けました福來でございます。御紹介の中にもありました通り、時間がもうありませんから、こゝに掲げられた演題の一部分丈を申上げて退き度いと考へて居ります、どうぞその積りで悪しからず御静聽あらんことをお願ひ致します

人間は唯ぼんやり生きて行くだけなら、御飯さへ食べて居れば生きて行けるのですが、世には選ばれた人間と云ふものがあることを私は信じて居ります。これを私自身專門の心靈研究の立場から充分お話申上げたいのですが、何分時間がありませんから略します。唯、其の結論だけを申しますが、此の選ばれた人間は自分自身の爲でなしに、身に負はされた使命を果す爲めに、何か或る知る可らざる力に迫られ

昭和十三年四月
帝國圖書館

始

て、自身を犠牲にして仕事をします。それと同じ様に、我が日本民族も選ばれたる民族でありまして、大なる使命を持つて居るのであります。その使命はどんなものであるかと申しますと、これ亦充分説明は出來ませんが、天照皇大神の天壤無窮の御神勅、神武天皇の御詔勅等を拜讀すればはつきりと認識せられる譯であります然しこの大使命たるや天壤無窮の御神勅に照示されてある永遠の使命——唯一時やつて終ると云ふ樣なものでなしに、永久無限に續く大使命であります。永久無限に續く大使命なるが故に、之を實現するに永久無限の擧國一致をしなければならぬのであります。然しながら永久無限の擧國一致と云ふ樣なことは、却々尋常一樣のことではないのであります。然るに我が大和民族なるものは、不思議にも永久無限に擧國一致して大使命實現の爲めに活動するところの、不思議なる先天的民族性を持つて居るのであります。

先程からして日本人と支那人との相違に就いて種々お話がありましたが、それに就ても澤山申述ぶべきことがありますが、今私の話に必要なだけを申しますれば、

由來支那人は「王侯將相寧んぞ種あらんや」と言ふ主義で、強者は力に委せて國を

攻めたり滅したり、王を廢したり殺したり、弱肉强食を事として、國家の爲めとか生民の爲めとか、そんな事を眼中におかぬ民族であることは、歴史の證する所であります。斯う云ふことではいかぬと云ふので、孔子が出で人倫五常の道を說かれたが、併し支那人には孔子の道が當篏つて居らなかつたのであります。如何なる偉人と雖、その民族の本性に合はないことを說いては、その民族を敎化することは出來ないと思ひます。故にあれ程の偉人孔子と雖、支那の民族を充分道德的に敎化することが出來ず、今日に到る迄支那民族と云ふものは孔子の敎へを奉じて居らんのであります。然るにその孔子の敎へなるものが、日本に來て非常に有效に活動したのであります。何故に孔子の敎へが支那に於て成長出來ずに、日本に於て成長したかと申すに、日本人をしてその道に從はしめたところの孔子も偉かつたけれども、その實我々日本人はあの孔子の敎を受取ることの出來る、立派なる民族性を初めから持つて居つたのであります。

又佛敎の事ですが、佛敎と云ふものは印度から渡來したまゝの佛敎ではどうしても日本民族に合はないのであります。日本民族は神靈の實在を信じ、敬神崇祖の信

仰の篤い民族であります。斯る民族に唯心所現、心外無法を說く大乘佛敎を持つて來ても、そのまゝでは日本民族の本性とは合はない。それで傳敎大師、弘法大師、親鸞上人、日蓮上人と云ふ樣な偉人が現はれて、あの印度の佛敎を充分日本の民族性と合ふ樣に日本化して、初めて日本佛敎と云ふものが生れて來たのであります。ですからあの佛敎は日本人の手によつて初めて日本化されて、茲に今日我々の信ずる大乘佛敎が出來上つたのであります。又キリスト敎はあのまゝではどうしても日本人に合はないから、段々日本化されつゝあるのであります。して見ますと日本人は如何なる敎へが渡來しても、その敎へが日本人に合ふならばそのまゝとるが、合はなかつたならば何處迄も日本人の民族性に合ふ樣に改造して行く驚くべき獨自性を具へて居るのであります。

この日本民族の獨自性――このものが孔子の敎へを受取り、このものが佛敎を改造して日本的にしたのであります。その日本民族の獨自性とは何でありますか。それは神代以來、日本民族に傳來した敬神崇祖の信仰であります。此事に就いて、日本國民の夢々見逃してはならぬ重大要事は、敬神崇祖の信仰は神國政道の宗源をな

して居ると言ふことであります。萬世一系の日本天皇は天照皇大神の御延長として天津日嗣の高御座に登り給ひ、皇祖皇宗の御遺業を繼ぎ、皇祖皇宗の御遺訓に循ひ皇祖皇宗の御守護の下に天下を知ろしめし給ふのであります。日本天皇の在ましますの所、千秋萬古、敬神崇祖の信仰が在ります。國民に於ても同じことです。天皇と御祖先を同ふして居る國民は敬神崇祖の信仰によりて忠と孝とを一本と心得、不惜身命の誠を以て一致團結して、天皇の御事業に翼賛し奉つて居ります。斯く敬神崇祖の信仰に於て、上下相一致して、天壤無窮の皇運を恢弘し行く所に神國日本の獨自性があります。日本民族は此の獨自性によりて一切の外來思想を消化して行くのであります。

して見ると敬神崇祖の信仰こそ日本精神の核心であります。日本兵が强いのも此信仰の爲です。日本人だつて、戰爭に出ない時は、人情として生命は惜しいけれども、いざ戰爭に出たとなれば、爆彈三勇士を初め、飛行機に乘つて居る勇士の樣に自分自身を忘れて猛進すると云ふことは、何の爲めであるか。それは祖先から代々傳はつて、日本人の魂の奥底に存在する所の日本民族獨特の信仰があるからであり

ます。恰度、母性愛の様なものであります。母性愛と云ふものは神秘不可思議なものであります。この母性愛と云ふものは、個人としての女の個人的思想から出るものではないのであります。女が子供を生むと云ふことは一個人の思想で出來る仕事ではない。何ものか知るべからさるものゝ働きー私は心靈の立場からそれを産靈の神と申して居りますが、この産靈の神様の働きによつて婦人は子を生む。子を生んだならば、繼續事業として生れた子を自分自身の生命を捨てゝも大事に育てる。母性愛と云ふものは一個人としての婦人の思想から出たんでなしに、個人意識の外に隠れて居る産靈の神様の不思議な働きによつて、出て來るのであります。それと同じ様に日本男子は家に居り戰に出ない時には生命が惜しいでありませうけれども、いざ戰爭に臨んで砲煙彈雨の中に立つたならば、恰度母親が自分の子を守る爲め、自分自身を忘れて活動する様に、それと同じ様に自分自身を忘れて活動すると云ふことになるのであります。斯う云ふ不思議な性質は、即ち日本人の血液中には神代以來傳來の敬神崇祖の信仰が流れ居ることの結果であります。斯る信仰は如何なる原始的民族にも有つたけれど、他の民族は之を失つて、唯獨り日本人のみが之を失

はずに所有して居るのであります。斯う云ふ點に於て日本民族は偶然に斯うやつて居るのぢやない、選ばれた民族として大使命を持つて居るのであります。

二、猶太民族との比較

所で神に選ばれたと云ふ點に於ては、何も日本民族丈ぢやない、ユダヤ民族も自ら選ばれた民族と斯う思つて居るのであります。併し日本民族の選ばれ方とユダヤ民族の選ばれ方とは、その意味を異にして居るのであります。ユダヤ民族は神に選ばれたと云ひますが、今から一千八百年程昔、神から約束せられたパレスタインと云ふ國を失ひました。西歴百三十五年に、ローマ皇帝からお前達をこの國に置くことは出來ないと云つて、パレスタインから追ひ出された。神から選ばれたと稱するユダヤ人が、神から約束された土地から追ひ出されたと云ふことは矛盾ではありませんか。然るに我々大和民族なるものは、此の點に於てユダヤ民族と異つて居る。此の日本國は天照皇大神様からこの豐葦原の瑞穗の國は我が子孫の永劫に君たるべき地なり、と仰せられた國で、而して日本民族は數千年間如斯持ち續けて居る。是れ即ち選ばれたる證據ではありませんか。特に重大視すべきものは、日本

民族はこの國家をデモクラシーの國家とせずして、家族主義の國家として居ることであります。この家族主義の國家と云ふことは、世界中で唯獨り日本民族だけが持つ實に不思議な約束であります。選ばれた民族として負はされた大使命を果すには永久無限の共同一致を必要とします。併しこれはデモクラシーの樣な個人本位の民族では到底出來ないことであります。唯、日本民族の如く全國一家族であると云ふ自覺を有することによりて、初めて永久無限の共同一致が出來るのであります。

この事に就て面白い話があります。安江大佐が中佐時代にユダヤ民族研究の爲めエルサレムに行つたことがあります。その時ユダヤの或る紳士が中佐に向つて、日本と云ふ國はどう云ふところですか、と云ふ質問した。そこで安江氏は「日本には天皇陛下が在らせられ、日本民族總べて一家族として一致團結して天皇陛下の御命令に絶對に服從する。それが日本民族である」と云つて説明した時ユダヤの紳士目をくり〳〵して驚いたのであります。「それは近頃實に不思議なことを聞くものかな。君の云ふその全國一家族と云ふことはこれはユダヤ人の理想である。ユダヤの國も昔は全國一家族であつたが、今は破れて了つた。それを今、日本人が實現して

居ると云ふことは實に不思議なことである」と云つて驚いたさうであります。ユダヤ人は世界で自分が一番偉いと思つて居ります。その偉いと思つて居るユダヤ人が自分達にすら實現出來ない全國一家族主義を、日本人が實現して居ると云ふことは實に不思議なことであると思つて驚嘆したのでありませう。世界で最も優秀な民族と云はれて居るユダヤ民族さへ實現することが出來ないことを、日本民族は數千年間常に之を實現し來つたのであります。こゝにも選ばれた民族と云ふ意義が現はれて居るのぢやありますまいか。しかも日本の家族主義は、唯血液に於て祖先からつながつて居ると云ふ丈ぢやありません。先程から申上げます樣に、日本民族は敬神崇祖の信仰によつて一致團結する所の民族であります。爰で詳い説明は出來ませんが、之には心靈學上深い意味のあることで、斯うでなくては選ばれた民族としての大使命を果すことが出來ぬのであります。生命の神は祖先を祀らぬ樣な民族に對して決して大使命を託しないのであります。

三、共産主義の運命

ユダヤ人が世界中に共産主義を擴めつゝあるのでありますが、その共産主義と云

ふものに對抗して、敬神崇祖の信仰に基いて出來上つて居る日本精神――この日本精神とユダヤ人の宣傳する共産主義とが相對立して大に戰はねばならぬ時代となつて來るのでありますが、其の結果はどうなるでありませうか。日本は支那に於て戰に勝つても、後に支那は殆んど全部共産主義に風靡されるであろうと誰でも思つて居るのであります。日支事變の後には共産軍が支那に跋扈して、茲に世界戰爭を起すであろうと云ふことは、多くの人によつて考へられて居ります。その共産主義なるものと、敬神崇祖を根柢として居るところの日本精神とが對立して、結局はどうなるでありませうか。これが、私の最もお話申上げたいと思つて居る事柄でありますが、殘念ながら時間がありませぬ。唯結論だけを申上て置きたいのであります。

共産主義と云ふものは自由平等を基調とするのであります。斯う言ふ主義は世の不平者に對して強い刺戟力を持ちます。國家に何か弱點がある時に――富豪が横暴を極めて勞働者を虐待するとか、或は一部特權階級丈が榮耀榮華に暮して國民大衆は働いても食ふに困ると云ふ樣な、國家に何か經濟上、或は思想上の缺點の生じた時に當つて、共産主義は其國を攪亂するに最も良い主義であると思ひます。けれど

もこれは決して一つの國家を建設する主義ではないのであります。此點を斷然、諸君に申上て置くのであります。それは歴史が證明して居ります。ハンガリーでも、ドイツでも、ポーランドでもチェック・スロワーキヤでも、世界大戰後思想の亂れたときに、ユダヤ人が共産主義で國民を攪亂させて、ソヴィエートの國にして仕舞つたのであります。國家に缺點がありて、國民は不平たら〳〵でありますから、ユダヤ人に自由平等などうまいこと云はれて、一時は革命運動に走つて仕舞つたのであります。併し改革はしたが、愈々共産主義の國が出來上つたとなると、どの國もどの國も、これは惡るかつたと云ふことに、必ず氣づくのであります。ですから此等の國々は一度はユダヤ人の口車に乘つて革命はして見たけれど、革命した後で、矢張元の通りが良いと、逆戻りした。殊にドイツの如きは最も著しい例であります。

然らばロシアはどうか。君の說によると共産主義で出來上つた國は後悔すると云ふが、ロシアはさうぢやない。ロシア丈は永久に共産國として成り立つんではないか。斯う質問する人があるかも知れません。私は之に對してノウーと答へます。これは今日新聞紙上に於て現れて居る通り、又特別に研究して居る人の話して居る通

り、ロシアの共産主義は行きつまりであります。革命の當時は、勞働者は賃金平等主義で、不平を云はずに働いたけれど、革命が終ると、平等主義ではいかんと云ふので、今日ではその人々の技能、仕事の多少に應じて賃銀を差別的に拂ふ樣になつて居るのであります。生活も平等主義で、勞働者も一國の主權者も同じ樣な質素な暮しをすると云ふのが、共産主義の理想でありますが、それは革命當時の事であつて、露國を改革する時は黨員も勞働者も平等な生活で、一生懸命に主義の爲めに奮鬪して來たが、革命が終り國が固つて參りますと、今度は主義者の幹部の方からして、俺は勞働者と一緒にまづいものを食ふことは出來ないと云ひ出した。而して今日では黨員の幹部は贅澤な生活をなし、勞働者は貧弱な生活をして居るのであります。又家族と云ふものは共産主義には要らぬと云つて、結婚も自由、離婚も自由、墮胎も自由、自分の親も養なはないで宜いと云ふことでありました。これが爲めにロシアの風俗潰亂は甚しいもので、捨子は無數にあります、墮胎は無數にあります老人はよぼ〳〵になつて街頭で行き倒れであります。それが爲にロシアは困つて仕舞つて、今日では離婚の自由は許さない、墮胎も禁ずる、自分の親は矢張り何時迄

も養へ。こんなことを命令して居るのであります。して見るとロシアの共産主義も國家を改革するには宜しかつたけれど、改革が出來上つた今日に於ては、共産主義と反對のことを實際にやりつゝあるのであります。それのみならず、レーニンやスターリンなどが革命の當時には、ロシア人に向つて、共産主義の爲めに一致團結せよといつて、國民を奮起させることが出來たけれど、今日では國民は共産主義に飽きて了つて、共産主義の爲めに一致團結せよと云つても、そんな事で云ふことを聞かなくなつたのであります。そこでロシアの爲政者は方針を變更して從來と全然反對の方向に出で、汝の祖國ロシアの爲めに一致團結せよと云ふ樣になりました。即ちロシアの爲とか、汝の故郷とかと云ふ樣なことに反對して來に共産主義者スターリンが、今日では汝の故郷ロシアの爲めに一致團結せよと云はなければ、どうしても國民を一致團結させることが出來ない樣になりつゝあるのであります。

如斯、初め國民は國家の現狀に對する不平の爲に、自由平等を宣傳する共産主義の笛に踊らされて改革をしたが、一度改革が出來上つて來ると、家族と云ふものがなければならぬ、克く働く人と怠ける人と平等に待遇されてはならぬと云ふ、人間

自然の要求が頭を擡げ出して、どうすることも出來ぬのであります。切めは共産主義の爲めに一致團結せよと云つたのを、今では汝の故郷ロシアの爲めに一致團結せよといひ變へる樣な時代になりつゝあるのであります。

四、ユダヤ民族と共産主義

凡そ一國を持つて居る民族は、一時の不平の爲に共産主義で革命を起して見ても矢張り其の昔が戀しいのであります。然るにユダヤ民族だけは國を持ちません。國を持つて居らぬユダヤ民族だけは永久に共産主義、共産主義と宣傳して、世界の至る所にバチルスを撒いて歩くのであります。それならユダヤ民族自身が共産主義を信じ、それによりて民族生活を支配して居るかと云ふに、決してそうではありません。ユダヤ人は神を信じ、家族主義によりて相互扶助し、資本主義によりて金を貯へて居ります。特に十九世紀の末から、神の約束したパレスタインを取り戻さねばならぬと言ふ要求からシオン運動を起して居ります。此の運動はユダヤ民族の偉人ヘルツル博士によりて提唱されたのであります。彼は一八九六年に「ユダヤ國」と言ふ書を著して、全世界のユダヤ人を泣かせました。其の中には次の如き言葉があ

ります。

ユダヤ人は一國民である以上、一國を持たねばならぬ。若しユダヤ人にして一國を持たうと思ふならば、必ず持ち得るのである。

これはユダヤ民族が自分の國を持たずに、世界各國に分散して居る爲に、民族獨自のユダヤ精神を喪失することを心配して、ヘルツル博士は自分の國を持つことをユダヤ人に勸めたのであります。實に人生の機微に觸れた卓見の言葉です。更に博士は次の如く說いて居ります。

如何なる人と雖も、國民を其居住地から他の居住地に強いて移住させる權力と財力とを有して居るものでない。之をよくするものとして、唯一つの思想あるばかりだ。其の威力を有するものは國家思想である。ユダヤ人は其の歷史の全夜を通じて、此の王國的夢を結ばなかつたことはなかつた。「エルサレムの春夏秋冬」とは、我々の古から渴望した言葉である。今や此の問題は、此の夢から白日的思想を作り得ると云ふことを示さんとするにある。

實に人間の魂を其の根元からゆすぶる樣な力强い熱誠に滿ちた言葉です。赤の他人

の私でさへ泣きたくなるのであります。況して、千八百年の間、憧れのパレスタインを失つて、世界の彼處此處に放浪して來たユダヤ人に取りてはとても堪らぬことであつたでせう。それからシオン運動が起り、ユダヤ民族の活動を支配して居ります。だから世界の諸民族中で、ユダヤ民族が一番日本民族に似て居るのであります彼等は決して共産主義などを眞理として實行して居るのではありません。このことは猶太研究の權威者陸軍大佐安江仙弘氏の著書「猶太民族の世界支配」によりて明白であります。

此の書によると、パレスタインには猶太人の經營に成る幾つかの共産村があります。孰れも二三百人より成る小い部落で、それより大きいものはありません。土地も家屋も、家畜も、農具も、器械も、種子も總て村全體の共有財産で、村民は其の力に應じて働くのであります。村民の衣食住は凡て村から支給されて居るのですから、村民は平等一樣の生活法をやつて居るので、各自の個性に從つて好きな生活を營むことは出來ません。例へば村民は皆同じ食物を食べるので、自分の好むものを喰べるわけには行きません。若い娘でも老婆でも同じ衣服を着るので、自分の好む

樣や縞柄の衣服を着るわけに行きません。夫婦に子供が出來れば、其子供は村の育兒所で育てるのですから、夫婦が其子を自分の許に置いて自分で育てることは出來ません。卽ち子供は村の子供であつて、夫婦の子供でないと云ふことになります萬事こんな風で、實に理想的な共産主義の實現であります。

此村に如何なる人が住んで居るかと言へば、多くは人生の生存競爭に負けて、ロシア、ポーランド、ルマニアあたりから逃れて來た貧乏人ばかりであります。共産村は人生の荒浪の避難所であります。善良な、柔和な、意氣地なき人間なら居れるが、個性的要求の欲望や野心を滿足させて力强く生きんとする人間のとても居れる所でありません。安江氏が相當な生活をして居る猶太人に向つて、

あなた方も共産村を組織し、共産主義をやつたらどうだ。

と訊ねた時、共の人達の答へは斯うでありました。

我々は兎も角も食ふに困る譯でなし、他から今壓迫を受けて居る譯ではなし、何を苦しんであんな窮屈な共産生活をする必要がありませう。實際、共産生活に入つて居るもので、中流以上のものは一人もありません。

之によりて見ると或るユダヤ人は共產生活をやつて居るけれども、それは人生に落伍して已むを得ずやつて居るので、共產主義を人生の理想として信じて居るのでないことが判ります。それなら、ユダヤ人は何故にコミンテルン（國際共產黨）を組織して、共產主義を國際的に宣傳するのでありませうか。其の理由は次の通りであります。

元來ユダヤ民族はアブラハムに引率されて、アラビヤのウルと云ふ一地方を去りて、パレスタインに移住した時から、もう四千年程になりますが、其間絕へず異民族から虐待され通しであつた。其の結果、彼等の心はひねくれて了つて、異民族を不倶戴天の仇敵として憎む樣になりました。特に彼等はローマ皇帝に憎まれて、紀元百三十五年に、ローマ帝國の版圖から逐ひ出されて、パレスタインを見捨てゝ世界の此處彼處へと流浪する身となつてからは、異民族に對する憎惡の念は益々强くなつた。其の時、彼等はパレスタインを立退くに際して、假令身は所々方々に離れ居りても、心は一致團結して仇敵異民族を征服して、自ら其の支配者になると言ふことを固く固く約束したのである。爾來千八百一年の歲月を經て居るが、彼等は

夢寐にも此の約束を忘れることが出來なかつた。だから彼等は國際的不平民族であります。此の國際的不平心が種子となりて一九一九年三月、モスコウに於てコミンテルンを生み出したのであります。

斯う云ふ譯ですから、國際的不平家としてのユダヤ民族が國際共產黨を作りて、世界中の國家を攪亂し革命を起さんとするのは、當然のことであります。それでユダヤ民族自身が共產主義を理想として居るのでなく、仇敵異民族を征服して自ら其の支配者とならんとする復讐的計劃を成就する手段として、孰れの國にも多數を占めて居る不平の勞働者を味方に引入れて、騷動を起させる爲めに共產主義を宣傳して居るのであります。唯カール、マルクスはユダヤ人であるけれども　マルキシズムの創始者として共產主義を眞理と信じて居る筈です。彼が斯る主義を建てるに至つたのも、詰りユダヤ民族に特有な現狀打破の革命思想を之によりて現はしたと見るべきであります。それは宜いとして、之を眞理としてユダヤ人に應用すると、ユダヤ人は永年の努力によりて作つた莫大な財產を失はねばならぬことになります其の邊のことはどうか、彼の心裡は判りません。併し彼の心裡はどうであらうとも

一般のユダヤ人は、

非ユダヤ人の生命は我の掌中にあり。特に彼等の黄金は我等の所有物なり。

と云ふユダヤ聖典の明文に循ひて、共産主義の法則は異民族の法則であつて、彼等の法則でないと思つて居る樣であります。だから、彼等は自分自ら實踐する理想として共産主義を說くのでなく、異民族に實踐させ、騷動を起させる爲に說くのであります。支那軍が陣地を引き揚げて逃げ去る時、バチルスを井戸水に投入して去つたと云ふことでありますが、これは自分で其水を飲む爲でなく、日本軍の軍人に飲ませる爲めでおつたのであります。ユダヤ人が世界に共産主義のバチルスを振り播くのも同じことであります。ユダヤ人に限らず、一體共産主義者とは大抵こんなものでないかと思はれます。私の知つて居る或る共産主義者は金の無い間は、宴會などに出ても、共産主義に循ひて、自分の會費を他人に出させましたが、金が出來ると資本主義者に早變りして、他人の會費など決して出しませんでした。或る私立の專門學校では學生の靴が無くなるので困つて居りました。調べて見ると、共産主義の學生數名ありて、靴を履かずに登校し、歸る時には共産主義の理想に循ひて他人

の靴を履いて歸つたのでありました。支那の共産軍なんてものは悉くこんなものです。共産主義の名によりて公々然として强盜をやつて居るのであります。

以上の通りですから、共産主義に基きて建てられた國家は何處にもありません。唯、パレスタインの共産村の樣な、小さい部落があるにすぎません。生存競爭の激しい人生には落伍者が澤山あるのですから、斯る哀れな人達の爲めに避難所として共産村を建てゝやることは、博愛人道上結構なことです。國家の爲必要なことです共産村とは云はぬけれども、日本にも同じ意味で出來た機關が現にあります。但し斯る村の住民は、國家の迷惑とならぬ樣におとなしく、だまつて村内に共産生活を營んで居るべきであります。それをいゝ氣になつて、共産主義の蓆旗を押し立てゝ村の外に乘り出し、共産主義を人生の最高理想などと宣傳流布して世を騷がすからよくないのであります。それも自ら共産主義を最高理想と信じてやることならば、まだ恕すべきでありますが、ユダヤ民族に至りては、自分自身は共産主義を信じないで、唯異民族を騷がせ、其の間に復讐の目的を達する爲めの手段として之を最高理想と宣傳するのですから、其のやり方は實に憎むべきであります。併しユダヤ人

の惡いことは勿論ながら、他の國民が其の宣傳に欺かれて騷ぎ出すと言ふのは、其の國家に何にか缺點のある結果ですから、欺かれる國民自身も惡いと言はねばなりません。ドイツ人初め西洋の諸民族は一旦欺かれて革命を起し、それから後になつて共產主義の非を悟りて革命前の狀態に歸らんとして居るのであります。悟り方がをそかつたです。吾が國でも、個人主義、理知主義で敎育された淺薄なる理知人中には共產主義に共鳴して一時騷き出しましたが、當局の措置宜きを得て鎭靜に歸しました。加之、滿洲問題の發生を契機として、俄然目ざめた日本精神に壓倒されて今ではぐうの音も出さぬ樣になりました。嘗て儒敎を受け入れ、佛敎を改造した神代から傳來の日本精神が、爰にも働き出して共產主義を擊退したのであります。だから吾が國では古來傳統の日本精神を呼び出し、之によりて國民思想を統制しさへすれば、共產主義など毛頭微塵怖るゝに足らぬのであります。それでロシヤは最初の程は共產主義の思想宣傳だけで日本に革命を起すことが出來ると樂觀して居たのですが、滿洲問題の時から猛然として奮起した日本精神の偉大さに舌を卷き、「日本はとても單なる主義宣傳では革命出來ぬ」と題を投げて、日本に對する政策を根

本的に建て直したのであります。卽ち武力を以て日本を革命させると云ふ方策を建てたのであります。爾來、ロシヤの極東軍司令官は日本軍が立ち上らぬ前に、無數の飛行機を以て一擧に日本の重要都市を爆擊し、一擧に日本を叩き潰すと云ふ新戰術に基き、武備の充實に日も足らぬ多忙さであります。然るにロシヤは今回の支那事變によりて日本軍の偉大なるのに舌を卷いて驚いたのであります。その上、國內には次ぎから次ぎへと騷擾事件が起りて、國民の一致團結が出來ないのであります。そこで最近ではスターリンも再び元に戻りて、矢張り共產主義を以て日本の思想界に喰ひ入り、その內部から騷動を起させ、その隙に乘じて武力を以て叩きつけると言ふ樣に計劃を立てゝ居るとのことであります。世界戰爭の當時、ドイツはこの手でやられたのであります。ドイツは武力の戰爭では決して負けて居なかつたのであります。併し國內では永く續く戰爭で非常に苦んで居りました。その隙に乘じて、豫て國內に潛んで居た共產主義者が色々なデマを放ちて民心をかき亂しました。其の結果、國內に暴徒が起り、帝國政府を倒して、共產主義政府を樹立しました。全く內部から崩壞したのであります。日本國民たるもの、益々日本精神を强養し、共

産主義の乘すべき隙の無い樣に、堅く一致團結せねばなりません。

五、觀念論

日本國民は敬神崇祖の信仰、及びそれから生ずる君民一家、忠孝一本の道德觀によりて一致團結して居る以上、決して共產主義などによりて攪亂される心配はないのであります。然るに世間に流行する大多數の學者は敬神崇祖の信仰を迷信であるとして、之を排斥するのであります。それで爰で此等の妄論を打破せねばなりません。

彼等は觀念論（唯心論）によりて敬神崇祖の信仰を排斥するのですから、私は先づ此の觀念論を批判せねばなりません。

觀念論は外界事物に關するものと、神靈に關するものとに分れますが、先づ外界事物に關する方から批判して見ます。此の觀念論は宇宙間の一切事物を個人の主觀的觀念にすぎずと說くのであります。山も川も月も星も、凡そ目に見ゆる一切のものを、個人の觀念と見るのであります。大乘佛敎の唯心所現心外無法と云ふ文句が此の說を代表して居ります。此の論は昔から非常に高遠なる哲理として持て囃されて居りますが、其の實、有閑哲學者の卓上空論にすぎぬものであります。其の理由を

說明するのには、心靈研究によりて得られた意識論から說き出さねばならぬのですが、可なり面倒ですから、爰では遺憾ながら之を省略せねばならぬのであります。併しそんな面倒な議論をなさなくとも、此の觀念論は今日では、實際に於て消滅した形なつて居るから、まあ良いと思ひます。それで爰では觀念論が實際的に消滅するに至つた理由だけを述べて置きたいと思ひます。その理由は甚だ簡單で、詰り觀念論は人生の指導原理として、何の役にも立たぬからであります。

一概には云はれぬけれど、哲學者と云へば、先づ書齋に立て籠りて卓上の觀念遊戯に耽つて居る有閑人であります。それで斯る學者が高遠な哲理などゝ言つて禮讚して居るものは、大抵は單に觀念遊戯として巧妙に組み立てられた理論たるに止るもので、人生の實際生活とは何の交渉も有たぬ無價値なものであります。觀念論の如きは其の最も著しきものであります。有閑人の哲學者から見て、觀念論は最も高遠な哲理となつて居りますが、併し人生の實際生活を營み居る實際人から見て、觀念論ほど馬鹿氣たものは有りません。早い話が、今暴戾支那軍を相手として眞劍に戰ひつゝある皇軍々人に對して、「暴戾支那軍は諸君の主觀的觀念として諸君の心

中に在るのみだ。諸君の心の外に、何處にも客觀的に實在して居らぬ」と云つて、觀念論を說く哲學者が有るなら、狂人として相手にされないでせう。暴戾支那軍を吾等に對し客觀的に實在すると認識すればこそ、吾等の生命を賭して眞劍に戰へるのであります。何事によらず、眞劍に生きて行かんとする實際人は外界事物を主觀的觀念とせずして、客觀的實在と認識して居るのであります。さもなくては、眞劍の仕事は出來ません。斯る理由によりて、昔から多數の哲學者が觀念論を高遠なる哲理として宣揚して居るにも拘らず、人生の實際生活を營み居る實際人からは無用の長物として一瞥だに與へられません。之を主張する哲學者を狂人として相手にしません。其の結果、さすがに超越の哲學者も狂人として取扱はれることを好まぬので、段々と觀念論を主張せぬ樣になり、今日では觀念論は消滅した樣なことゝなつて居ります。觀念論其物が理論として惡いと云ふ理由で消滅したのでなく、實際生活を營む實際人に相手にされぬと云ふ理由によりて消滅したのであります。

斯樣に外界事物に關係する限り、觀念論は實際的に消滅した形になつて居りますが、神靈に關係しては觀念論は今日でも非常なる勢力を以て思想界を支配して居り

ます。神靈に對する觀念論とは、神靈は主觀的觀念として個人の心中に存在するだけで、客觀的には存在せぬと云ふ議論であります。嘗て某專門學校の敎授某氏は神は人間の心に在るだけで、心の外に客觀的に實在して居るものでない。と云ふ議論を堂々と某雜誌に發表しました。此の議論を押し詰めて行くと、

天照皇大神は個人の心中に在るのみで、伊勢の神宮には無い。從つて吾等は唯心中に在る天照皇大神を禮拜して居れば足りるので、わざ〳〵伊勢神宮まで行つて禮拜する必要はない。

と云ふことになります。實に國民の精神敎育上由々しき惡思想であります。斯る惡思想が雜誌上に現はれても、世間の學者達は別に驚きもせず、平然として冷靜に見て居りました。現代日本の學者達が神靈問題に關しては、殆んど皆觀念論に贊成して居ることが判ります。

右の如き觀念論が日本傳來の敬神崇祖の信仰を傷けることは明白ですから、昔ながらの日本精神を呼び戻して、神國日本の眞姿を顯現するのには、先づ斯る觀念論から撲滅して掛らねばならぬのであります。併し之を學理的に根抵から撲滅するに

は、前に申した通り、心靈研究によりて得られた意識論から說き出さねばならぬのでありますが、爰では其の詳論を省略することにして、唯その結論丈けを述べることに止めます。

六、知覺と靈覺

心靈研究によると、認識には知覺と靈覺との二種類があります。知覺とは感覺機關を介して行はるゝ認識で、例へば眼で外界事物を見て、山なら山、川なら川と認識することであります。靈覺とは感覺機關を離れて行はるゝ認識で、例へば眼を閉ぢたまゝで身邊の事物を何でも認識することであります。知覺は物理的法則の支配下に於てのみ行はれます。例へば眼で外界事物を認識するには、眼が外界事物に向つて開かるゝこと、外界事物が光線に照らされて居ること、外界事物が眼から餘りに遠くないこと、眼と外界事物との間に光線を遮斷する物のないこと等の如き物理的條件を必要とするのであります。然るに靈覺は物理的法則を全然超越して働きます例へば靈覺の一種たる透視（天眼通）の如きは眼を介せずして物を見るのですから光線の有無や物の遠近に一切關係なしに外界事物を認識します。斯樣に物理的法則

を超越して自由自在ですから、靈覺を神通認識と申します

右の通りですから、知覺は物理的法則の下に存在する物のみを認識して、物理的法則を超越するものは絶對的に認識し得ないのであります。然るに靈は物理的法則を超越する實在です。だから知覺は靈を認識することが出來ません。唯靈覺が之を認識するのみであります。それで宇宙は知覺で認識出來る世界と、靈覺によりて認識出來るが、知覺では認識出來ない世界とから成立して居るわけです。前者は物理的法則に支配されて居る物質の世界で、後者は物理的法則を超越して神通自在に活動する靈の世界であります。

右の樣に說くと知覺と、靈覺とは全く隔離して、別々に働いて居る樣に思へます勿論そう云ふ場合もありますが、多くの場合に於てはそうではありません。元來、知覺も靈覺も永遠の生命を向上發展させる爲めの官能にすぎぬのでありますから、知覺は常に靈覺の指導を受くことが正しき生道の原則となつて居ります。人間が肉身を具へて物質世界に生きて居る限り、物質世界を相手とする知覺の認識が其の意識の中心に現はれて顯在的に働いて居ります。併しそれだけでは、人間は單に此の

世に生きて居るだけで、生きて居ることの意義が現はれて居りません。生きて居ることは有限ですが、生きて居ることには無限の意義が含まれて居ります。此の無限の意義は知覺によりて認識されないで、唯靈覺によつて認識されるのであります。それで正しき生道を踐んで生きる人に於ては、顯在意識の中心に在りて働く知覺は常に魂の底にありて潜在的に働く靈覺に指導されて居ります。卽ち靈覺は人間意識の外に自體を隱して居りながら、影武者となりて人間意識の舞臺に活動する知識を指導して居ります。靈覺が非常に强い時には、人間意識の上にはつきり露出しますけれど、それは特種の場合に限ることで、普通の場合では、靈覺は人間意識の外から潜在的に働いて知覺を指導することゝなつて居ります。併し假令潜在的であつても、靈覺の働きの人生に及ぼす影響は至大なるものであつて、人間はそれによりて知覺の世界に知覺以上の深遠なる意味を感ずるのであります。例へば神社は單に知覺に現はれただけでは、別に有り難味のないものだけれど、吾等が神前に額づき居る間に、眼には見えぬけれど、何か神靈ありて吾等に臨み居る樣に感ずることがあります。そうすると神社は大變有り難いものとなります。靈感と云ふのが之です。

これは吾等の靈覺が神靈の實在を認識した結果です。併し此場合、靈覺は吾等の心の底に潜在して居るのですから、其の神靈認識は吾等の意識の上に明白に現はれないで唯何となく神靈の存在すると云ふ靈感＝信仰として現はれるだけであります。吾等が電車や食堂などで遇然或る人を見る時、此の人を何處かで前に見たことのある樣に感ずることがあります。何時何處で見たかは判らないが、兎に角前に見たことのある樣な氣がするのであります。斯う云ふ時、吾等は何時何處で見たかと思ひ出さうと努めるものですが、中々思ひ出せないものであります。不快だけれど、仕方なしに其儘にして置いて、他の仕事に心を向けて居る時、何時、何處で見た人であると云ふ事が突然と思ひ出されて、胸がすーつとなります。これは其の人を何時何處で見たと云ふ記憶が、最初は潜在的に働いて居たから、吾等は唯何處かで前に見た樣な氣がすると感ずるのであります。靈覺もこれと同じで、吾等の心の底で潜在的に神靈を認識して居るのですから、人間意識の上には、唯何となく神靈が存在すると云ふ靈感＝信仰となりて現はれるのであります。だから信仰は理知主義者の言ふ樣に、單なる氣休めの主觀的想像ではありません。靈覺の潜在活動による神靈

實在の認識であります。

人間が知覺の物質世界に肉身の生理的生存を維持するだけの意味で生き居るものならば、實に人生はつまらぬものであります。とても眞面目に生きて居ることは出來ません。氣の强きものは情知らずの我利我利盲者となるでせう。氣の弱い者は人生をはかなむ厭世家となるでせう。中間の者は刹那主義の人生享樂者となるでせう。斯んな事では、人類生命は荒み行くばかりであります。けれど永遠の生命を流し出す神は、人間に靈覺を與へてくれました。人間はこの靈覺に導かれて、物質の世界に有限の肉身的生命を持ちながら、永遠の生命に奉仕して、不惜身命の誠を盡くして居ります。斯くて人間は人間以上の勇者となりて力强く生き得るのであります。日本の軍人に斯る靈覺の指導がなかつたならば、死の間際に、天皇陛下萬歳を唱へながら、莞爾として息を引き取ることがどうして出來ますか。

七、有閑哲學者の靈覺缺乏

特殊の靈能者は別として、普通人に於ては生存競爭の烈い人生に立ちて、眞面目に眞劍に生きるべく努力する時、靈覺は其の知覺を指導する爲に働き出すを原則とす

るものであります。之に反して、世間の風波を餘所に、書齋に籠りて、有閑研究の趣味に耽る哲學者の如きは、靈覺によりて指導する必要がありません。だから靈覺は有閑哲學者に現はれぬものであります。宗教の場合に於ても、信仰を研究の目的物としないで、信仰によりて人生に强く生きる人には眞の信仰がありますが、宗教學者の如きは信仰に伴ふ種々の心理的或は社會的現象を詳しく知つて居るのみで、信仰其物を缺乏して居るのはそれが爲であります。だから哲學者は知覺認識のみを有して、靈覺認識を有たぬものであります。それで哲學者が自分に靈覺の缺乏することを自覺して謙遜であれば宜いけれど、其の自覺がないから始末が惡いです。哲學者は大抵唯我獨尊のものです。自分に靈覺が缺けて居ると思はないで、人間に靈覺と言ふ樣なものはないと決めて居ります。彼等の有する知覺を人間の唯一の認識となし、それ以外に認識なしと決めて居ります。從つて知覺で認識出來る物質の世界を宇宙全體となし、それ以外に靈の世界なしと信じて居ります。されば昔、英國のベーコンが知覺で經驗出來るものゝみが實在するので、知覺で經驗出來ぬ神や靈は迷信の偶像であると云つて之を斥けました。之は經驗主義と云つて哲學史上有名な

學說です。今日でも此の學說が凡ての學者を支配して居ります。今日の學者は知覺的に認識出來ぬからと云ふ理由によりて、靈の實在を否定して居ります。「神靈は人間の心中にのみ在りて、客觀的には實在せず」と云ふ觀念論を眞理として信じて居ります。それで觀念論は知覺のみを有して、靈覺を缺乏する人達の理論で、全然間違つて居ります。譬へて言ふと、自分の不具を自覺せざる盲目者が色彩の世界を否定する樣なものであります。盲目者が自分の不具を自覺しないで居たなら、自分の手で觸れ、耳で聞くことの出來るもののみを存在するものと信じて居るに相違ありません。然るに爰に明目者ありて、手で觸れることも出來ず、耳で聞くことも出來ず、唯眼によりてのみ見得る色彩の世界があると說いたなら、盲目者は手にも觸れず耳にも聞えぬ色彩の世界など有る筈なしと反對し、明目者を迷信家と云つて嘲笑するでありませう。觀念論を主張する學者は丁度右の盲目者と同じです。彼等は靈覺を缺乏する不具者であります。併し彼は其の不具者たることを自覺しないで、知覺認識を唯一の認識とし、之れ以外に靈覺認識ある筈なしと信じて居ります。その結果、彼は知覺により認識し得る物質世界のみを客觀的に實在するものとなし、

知覺によりて認識出來ぬ靈の如きは心內に觀念として實在するのみで、客觀的に實在しないと云ふ觀念論を主張し、靈の客觀的實在を說く靈覺者を迷信家として、嘲笑するに至るのであります。斯る理由によりて、神靈の實在は眞理で、之を否定する觀念論が間違ひでありますけれど、今日の思想界では、少くとも知識階級層では、觀念論が眞理として通り、神靈實在說が迷信として斥けられ居るのであります。色彩問題の場合では、盲目者が自分の不具を自覺して居りますから、明目者に敬意を表して、自分では經驗出來ぬけれど、色彩の世界ありと言ふことを信じて居ります。然るに神靈問題の場合に於ては、學者は自分の不具を自覺せずして、高慢であるから始末が惡いです。彼等は知覺を唯一の認識とし、靈覺の存在を絕對に信じないのです。從つて神靈實在說を迷信であるとしてベーコンの經驗主義を主張するのであります。現今斯る學者が多數ありて思想界を支配して居りますから、觀念論は眞理として巾をきかし、神靈實在說は迷信とされて居るのであります。然ば神靈實在說は永久に迷信として葬り去られるかと云ふに決してそうではありません。觀念論が巾をきかすのは、太平の世の御蔭です。スポーツ、ダンス、オペラ等が人生享樂の

文化時代に巾をきかすと同じ意味で有閑學者の觀念論も巾をきかします。けれど國難が勃發して太平の夢を破り、國民が一致團結して國家の爲めに奉公せねばならぬ時至りては、觀念論の如きは卓上の空論として斥けられ、神靈實在の信仰が眞理として光輝を放つ様になります。それは御話の進むに連れて判ります。

八、自我の目醒と靈覺の消失

原始時代の人間は靈覺強くして、容易に神を認識し得たのであります。然るに時代の進むに連れて靈覺を失ひ神を認識し得ぬ様になりました。何故に斯うなつたかと申すに、學者は人智の進歩する必然の結果だと說明します。其の說によると、元來神を信ずると云ふことが迷信である。だから人間の知識が進歩すれば、其必然の結果として神の信仰は消滅するわけであると云ふのであります。併し此の說明は斷然間違ひであります。第一、神を信ずることを迷信とするのは靈覺を缺乏する人の妄斷にすぎません。神の實在は、唯靈覺によりてのみ認識し得られるのであります。原始時代の人間は靈覺が優れて居たから、能く神を認識し得たので、決して迷信ではありません。然らば何故に時代の進むに連れてそれを認識し得なくなつたかと云

ふに、それは自我成長の結果です。自我が目を醒し成長し行くと云ふことは、人間本性の然らしむる所です。自我が目を醒すと、自由を求める、知識をあさる。其の必然結果として靈覺が曇り、神を見失ふ様になります。だから自我が目を醒し成長し行くと云ふ人間の本性が、人間と神とを遠ざけることの原因となるのであります

このことは聖書の内に巧妙に說いてあります。聖書によると、人間の始祖、アダムとエバは資性忠良にして克く神に仕へ、神に愛せられてエデンの花園に平和の生活を送つて居りました。然るに或る時、神の禁斷せる果實を取つて食べたので、其の罪によりてエデンの花園から追ひ出されました。アダムとエバとが何故に神の禁斷を犯したかと申すに、それはサタンに誘惑されたからであります。サタンは

神、汝等が之を食ふ日には、汝等の眼開け、汝等神の如くなりて、善惡を知るに至ることを知り給ふ。

と言葉巧に說きました。此の言葉は自我を目醒まし、自由と知識との欲求を刺戟するに十分でありました。忠良なアダムとエバも此の要求の衝動に抵抗し切れないで終に罪を犯してエデンの花園から追ひ出されたのであります。エデンの花園から追

ひ出されるとは、靈覺を失つて、神との交通を斷たれて、知覺の物質世界に放浪する身となつたことを意味するものであります。アダムとエバとは自我の目醒め、自由と知識との欲求に迫られて罪を犯し、其の結果として靈覺を失ひ、神との交通を斷たれ、知覺の物質世界に放浪する樣になつたのであります。實に人間の罪の由來並に其の結果を巧妙に説明したものであります。人間は永久に自我のために靈覺を曇らし、神を見失ふ樣になるのであります。

靈覺、並に神の認識に及ぼす自我の結果が右の通りですから、昔から宗教家は一般に自我を惡いものとして居ります。自我を捨てゝ、靈覺を開き、神との交通を恢復することを教へて居ります。其の内で、特に吾等の眼に着くのは佛教でありますが、佛教ほど徹底的に自我を厭ひ、之を否定すべしと説いたものは他にありません。自我を忘想の産物とし、自我に伴ふ感情、欲望を煩惱とし、一切之を捨離して涅槃に入るべしと説いて居ります。涅槃に入ることが佛教の目的です。併し涅槃は一切の自我と煩惱とを捨離した寂靜の境であると、消極的に説いてあるだけですから、其の實相の何であるかは大なる謎で、佛教研究家を惱まして居ります。併し心靈研究

の立場から云ふと、自我及び自我に伴ふ一切の煩惱を消滅させて了へば、必然の結果として靈覺が開發されねばなりません。だから涅槃の實相は靈覺として解釋さるべきであります。佛を覺者と申しますが、それは靈覺者のことでなくてはなりません。だから近來流行の解釋によると、釋尊は唯、一切の煩惱を捨離して、寂靜安易の心地になられただけで、それ以上別に靈的に不思議なことはなしと見るのでありますが、私は釋尊は涅槃に入り、靈覺を開發して居られたものと信じます。釋尊が他人の眼に見えぬ靈と問答して居らるゝことが小乘經典中に能く説いてあります。學者は之を後人の想像的に附加したことであるとして片付けますが、之は釋尊に靈覺なしと見るからで、釋尊に靈覺があつたと見る私共から云ふと、釋尊は靈と問答されたことを事實として解すべきであります。加之、大乘經典になつて來ると、靈覺の記述が益々盛になつて來ます。華嚴經によると、佛は海印三昧に入りて、十方三世の一切現象を刹那に認識されたとしてあります。これなどは靈覺の理想的なるものです。して見ると、靈覺を開發することが佛の特色であります。佛が煩惱を消滅して涅槃に入れば、必然の結果として靈覺を開發するわけです。昔から多數の名

僧が坐禪の修行によりて、完全ではなくとも、或程度の靈覺を開發したことは事實であります。

九、自我出現の理趣

人間は自我の爲に靈覺を失ひ、神と遠ざかる樣になることは事實であります。併しそれが爲に、自我其物を根抵から絶滅させようとすることは、間違ひであると信じます。何故なら、自我は人類永劫の生命を發展せしめんとする太靈の神意によりて出現したからであります。自我は人類生命の發展に取りて無くてはならぬ、大切な役目を有つて居ります。自我無くしては人類生命は發展出來ません。併し爰に見逃してはならぬ重大要事は、自我は神の認識と共にあることによりて、初めて人類生命を發展させると言ふことであります。神の認識から離れた自我は人類生命を荒廢させるものであります。何故と言ふに、抑々自我は自我自身の爲めに現はれたものでなくして、自我を超越する大生命の神意に奉仕する爲めの機關として現はれたものだからであります。自由でも知識でも、自我自身の爲めの自由、知識ではなくして、大生命に奉仕する爲めの自由、知識であります。だから自我は其の自由と知

識とを以て大生命に奉仕することによりて、人類生命は發展し行くのであります。アダムとエバとは此の自由と知識とを神に奉仕する爲めに使用せずして、自分自身の爲めに使用したので、エデンの花園から逐ひ出されて、知覺世界に放浪する身となつたのであります。それで神の認識の指導によりて自我を活動させること、或は自我の活動によりて神の意志を實現させることが、生きることの正しき道であります。私は之を生道と名けて居ります。

自我の認識は知覺に限られて居ります。從つて自我の認識する世界は物質の世界であります。然るに大生命の神意は靈の世界に屬するのですから、自我によりては到底認識出來ないのであります。それで自我は知覺によりて認識し得る物質の世界を唯一の世界と信じ、そこに自由を求め、そこに知識をあさりて生きることを生命の全意義と決めて居ります。靈覺を有たぬ現代學者は凡て斯る自我の知識によりて人生を解釋します。其の結果が個人主義、自由主義、理知主義等の人生觀であります。知覺のみを有し、靈覺を有たぬ自我の行く道としては、これより外に道がないわけであります。それで人間が正しき正道を踐んで生きんとするには、自我出現の

理趣に則りて自我の活動を統制せねばなりません。自我出現の理趣は永遠生命の神意に奉仕する機關として活動することであります。併し此の神意は唯靈覺によりてのみ認識されます。自我の知覺では認識されません。それで自我出現の理趣に循ひて自我を活動きせるのには、神意の知覺によりて自我を統制せねばなりません。此の靈覺によりて統制さるゝ時、初めて自我は大生命の神意に奉仕して活動することとなります。それで自我を自我自身の爲めの自我と見る個人主義、それに伴ふ自由主義、理知主義の人生觀は大生命の神意に反きて、人類の生命を荒廢させるものであります。人間が自我と自由と理知とを大生命の神意に則りて統制することにより て初めて人類の生命は正しき生道を踐んで昌榮し行くのであります。

十、無我的自我—日本我

自我が神意の靈覺によりて統制される時、其の活動は無我的となります。爰に無我と云ふは自我の否定ではありません。自我が自分自身の爲めと云ふことを忘れて自我超越の大生命の神意に奉仕する時、之を無我と申します。もつと通俗的に申さば、自我が自分自身を忘れて自分の盡すべき任務に奉仕することであります。之に

反して自分自身の爲めと言ふことを思ひながら仕事に務めることを有我的自我の活動と申します。

有我的自我の活動は自我の知識、自我の能力の範圍内で行はれます。之に反して無我的自我の活動は自我の知識を超越する靈覺によりて導かれ、自我の能力を超越する靈能によりて助けられます。それで無我的自我の活動は有我的自我によりて成就することの出來ない仕事を奇蹟的に成就するに至ります。其一例は劍道に於て見ることが出來ます。劍道の極意は無我的自我の活動に在ると信じます。唯、攻擊の一念のみありて、自我を忘れる時、自我の能力以上の靈能が活動して、死地に活路を開きます。

切り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ
身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれ

宮本武藏は六十餘回に亘る無我的自我の眞劍試合によりて、萬理一空の眞理を悟りました。山岡鐵舟は次の如く說いて居ります。

論レ心ニ總是惑ニ心中。　疑帶レ輸レ贏還失レ工。

要レ識劍家精妙處。　電光影裏斷二春風一。

是れ亦萬理一空の眞理であります。これは知覺による理知の境ではありません。唯靈覺によりて悟られる眞理であります。禪家の人々は坐禪の靜觀によりて之を悟ると云つて居りますが、私は劍々相磨する刹那に於て、自我が無我的に活動することによりて、初めて眞正に之を悟ることが出來ると信じます。併しこれは劍道に限りません。生命の眞劍活動は凡て此の通りであると信じます。

日本人の神代時代の祖先は其の優れた靈覺によりて、天壤無窮の御神勅を大生命の神意と信じ敬神崇祖の信仰によりて其實現に奉仕する無我的自我を具へて居りました。私は此の無我的自我を日本我と名けて居ります。日本民族は選ばれた民族として、神代時代から此の日本我を遺傳して居ります。此の日本我は靈の世界との交渉によりて活動するのですから、日本人は平素太平無事にして個人的生業にいそしんで居る時には、之を自覺せずに居ります。けれどいざと云ふ時には此の日本我は魂の奥底から猛然と動き出して、活動するのであります。それは丁度、母が母性愛の本能に迫られて、身を捨てゝ其子を守る樣なものです。母性愛の猛り出すや、母

の自我は母性愛に使用さるゝ機關にすぎません。それで母は母性愛に一身を捧げて無我的に活動するのであります。それと同樣に、敬神崇祖の信仰を以て大生命の神意に奉仕する働きは、一の本能となりて日本人の魂の奥底に潛んで居ります。事なき時は眠つて居るけれど、いざと云ふ時には、獅子奮迅の勢を以て猛り出し、天壤無窮の御神意の爲め＝天皇の爲め＝皇國の爲めに奉仕すべく無我的に活動するのであります。支那に出征せる皇軍將兵の行動は之を遺憾なく證明して居ります。世界を驚嘆させるあの無我的活動はどうですか。戰場に於ける幾十萬の皇軍將兵は悉く皆宮本武藏であり、山岡鐵舟であります。こんな無我的活動が有閑哲學者の禮讃する觀念論や個人主義、自由主義、理知主義等の哲理から出て來るものではありません。唯、神代から遺傳された敬神崇祖の信仰を以て、天壤無窮の御神意に奉仕せんとする日本我の發動から出て來るのであります。

十一、絶對神意と眞理

永遠に生き、永遠に產み、永遠に彌榮えんとする宇宙太靈の神意（皇產靈）は天壤無窮の大生命を實現する爲の官能として無數の自我を分現しました。而して自我は

その官能を敏活に發揮する爲めに自由と理知とを賦與されて居ります。それで日本我は共の自由と理知とを以て、天壤無窮の神意に奉仕することを使命として居ります。併し自我はそれ自身の本性のなすが儘に任す時には唯我獨尊となり、神意から離れて自由と理知とを自已自身の爲めに私用せんとするのであります。それでは自我分現の理趣にもとります。だから自我は悍馬の如きもので、常に統御を要するのであります。此の統御は靈覺によりて行はれます。即ち先づ天壤無窮の御神勅中に大生命の神意を直感せねばりません。而して敬神崇祖の信仰によりて自我を統制して、大生命の神意實現に奉仕せしめるのであります。斯樣に大生命の神意と敬神崇祖の信仰との統制を受て活動する時、自我は日本我となります。無數の日本我が一致團結して天壤無窮の御神意に奉仕する時、神國日本の眞姿が顯現して參ります。それで神國日本は個人主義や民主主義による國民の團體ではなくして、天壤無窮の御神意を絶對眞理として、之に奉仕する事を使命とする日本我の團體であります。

神代以來、神國日本は時に汗隆晦明の變ありと雖、兎に角數千年の間、共の眞姿を持ち續けて參りました。明治維新の際には、共の眞姿は特に盛大でありましたが

それから後は年と共に段々微弱となりて今日に至りました。これは太平無事の爲め民心が萎微したのと、西洋思想の輸入とによる結果であると信じます。

明治維新後の日本國民は日清、日露の戰爭で一時緊張して日本我を發揮したけれど、大勝利を得たので、心驕り氣弛みて、自我の我儘根性を現はし、享樂主義の文化生活に傾き初めました。搗てゝ加へて、アダム、エバの子孫の國から兼て到來しつゝあつた物質思想が此の我儘根性の働きに拍車をかけました。共の結果、個人主義、自然主義、理知主義が一世を風靡する樣になりました。神靈觀念論者が跳梁跋扈して、日本精神の核心たる敬神崇祖の信仰を迷信として嘲笑する樣になりました昔から强大なる國家も斯の如くにして滅亡したのであるが、日本の未來はどうなることかと、憂國の士をして浩歎せしめました。併し選ばらた民族の國と然らざる國とは、此點に於て、何か異る所がなくてはならぬ。若し日本にして眞に大生命の神意實現の大使命を帶びて出現した神國であるならば、神は何らかの方法によりて荒頽せる國民の目を醒して大使命への奉仕に轉向せしめ給ふ筈であります。併しそれは如何なる方法で行はれるのでせうか。世間には能く、國民の荒頽を救ふ爲めに

靈的偉人の出現を待望する人達があるが、私は空頼みだと信じます。偉人の教化によりて救はれる樣な墮落は、まだ左程の墮落でありません。滔々たる國民が、國家の成立をも危くする程に墮落し切つた時には、如何なる靈的偉人と雖どうすることも出來ぬと云ふことは、釋迦、キリスト、孔子、ソクラテースの場合が之を證明して居ります。生命の神は斯る國民を誡めるのに、拔き差しならぬ絶大の力を以てします。それは國難の苦を以て國民を打ちのめすことであります。併し斯る苦で打たれた結果、國民が起つか倒れるかと云ふことは、神に選ばれて居るか否やによりて定ります。國難の苦は神の試錬です。選らばれた國民は起ち、選らばれぬ國民は倒れます。若し打ちのめされて倒れる樣ならば、其國民は神に見はなされた國民ー大生命の神意實現に用なき國民です。之に反して、神意實現に役立つものとして選ばれた國民であるならば、國難の苦に目醒めて奮然として猛り立ち、國家の爲め一致團結して不惜身命の活動をやり出します。吾が日本の場合は正にそれであります。

過去數十年間、吾が國民は太平の世に慣れて享樂の文化生活に傾かんとして居た所を、西洋思想、特に猶太思想に迷はされて、益々墮落のどん底に落ちんとして居

りました。所が一方には其の反動として、時代の流れに逆行して、「日本精神を復興せよ」の叫び聲が社會の所々に起り始めました。墮落し行く社會の何處かに、日本精神が目醒めんとして蠢きつゝあつたのであります。斯る時に當りて、滿洲問題が勃發し、日本は國際聯盟の反對を受けて、國難の非常時局に直面しました。それに刺戟されて、社會の底に蠢きつゝあつた日本精神が目を醒して、西洋かぶれの非國民的思想を猛烈に排擊しました。其時まで多數を恃んで無茶を押し通して政界を亂した政黨人も、日本精神の勢に壓倒されて、大變におとなしくなりました。選ばれた民族としての意義が爰に現はれて居ります。併し國際聯盟の反對は國難として、まだ餘り大いものではありませんでした。從つて日本精神の目醒めも表面だけに止りて、其核心たる敬神崇祖の信仰にまで及んで居りません。だから世間では「日本精神を復興せよ」の叫び聲の高きにも拘はらず、學者達は之と矛盾する神靈觀念論を公々然と宣說し、而して世人は少しも怪しまないのでありました。然るに今や日本は支那事變を契機として大國難の苦を加へられて居ります。ぐず〳〵しては居られません。有閑學者の神靈觀念論などに惑はされて、神は有るか無いかと迷つて居

る時ではありません。神代から傳來の敬神崇祖の信仰を以て、天壤無窮の神意に奉仕すべく、擧國一致して神國日本の眞姿を如實に顯現せねばならぬ時となりました選ばれた民族としての日本國民は、必ず此の大事業を成就するのであります。

要するに大元靈の神意は絶對です。此の神意の體現として天壤無窮の御神勅は絶對です。天壤無窮の神意の實現に奉仕して無我的に活動させる樣に自我を統制する指導原理として、敬神崇祖の信仰は眞理です。敬神崇祖の信仰に統制されて無我的に活動する自我＝日本我は眞理です。其他、絶對神意の實現に役立つ信仰或は思想は凡て眞理であります。之に役立たぬものは、如何なるものでも眞理ではありません。例へば神靈觀念論の如きは其代表者であります。有閑學者は自我の理知享樂＝主觀的趣味の爲に觀念遊戯に耽りますが、此の觀念遊戯に於て、最も巧妙に組立てられたのが神靈觀念論であります。だから哲學者は之を高遠なる哲理として禮讃します。けれど斯るものは天壤無窮の絶對神意を實現して、國難を克服する上には何の役にも立ちません。反つて敬神崇祖の信仰を鈍らして、眞劍なる日本我の活動を害するのみであります。斯るものは世人が趣味本位の享樂生活で暮す時には、個人

主義、自然主義等と共に眞理として持てはやされます。全く太平の餘澤です。併し國民が非常國難の苦に打ちのめされて、奮然蹶起して神國日本の眞姿を顯現せんとする時には、眞理として通るものではありません。だから眞理の最後のテストは有閑學者の卓上空論に在るのでなくして、國家永遠の生命を流し出す天壤無窮の絶對神意の實現に役立つや否やに在るのであります。

十二、神國日本の眞姿

以上の通り說き來りて、爰に神國日本の眞姿を明徵にする段に至りました。

概括的に要說すれば、神國日本の眞姿とは永遠に產み、永遠に生き、永遠に彌榮えんとする宇宙太靈の神意(皇產靈)を體現し給ふ萬世一系の天皇を神聖絶對者と仰ぎ奉り、國民が敬神崇祖の信仰を以て一致團結し、天皇の御統治事業に奉仕する一多相卽の生命態であると言へます。更に其の內容に就きて檢討すると、(一)天壤無窮の御神勅(二)萬世一系の天皇(三)敬神崇祖の信仰が重要なる三要素となつて居ります。

第一　天壤無窮の御神勅、國家を成立せしめる根本原理は永遠に產み、永遠に生

き、永遠に彌榮えんとする太靈の神意であります。日本に於ては、此の神意は天照皇大神と具現し給ひました。だから大神の下し給ふた天壤無窮の御神勅は正しく太靈の神意其物を露現するものと見るべきであります。神國日本は此の御神勅に循ひて肇められました。だから神國日本の眞姿は永遠に產み、永遠に生き、永遠に彌榮え行かんとする太靈の神意を根元として成立して居るのであります。

宇宙太靈の神意が國家成立の根本原理であると言ふことは如何なる國家にも當て嵌まる哲理であります。併し此の神意が天照皇大神として具現し、而して天照皇大神の御神意によりて神國日本が肇められたと云ふ歷史的事實は、日本民族のみが所有して、他の民族の有せぬものであります。此の歷史的事實こそ日本民族をして世界驚異の民族たらしめる所の重大原因であります。宇宙太靈の神意は國家成立の根本原理であると云ふことは、正しい哲理であるけれど、それだけでは國民の心魂を刺戟する特別の力とはなりません。それが祖先の建國事業と言ふ歷史的事實となりて現はれることによりて、初めて國民の團結心と犧牲心とを呼び出す力となるのであります。歷史に現はれた祖先の事業は國民の思想に對して不思議な支配力を有す

るものであります。尊き祖先の歷史を有すると有せざるとは國家の發展に至重至大の關係を有するのであります。日本國民が世界無比の團結心と犧牲心とを有するのは、單なる哲理によるのでなくして、吾等の御祖先なる天照皇大神が宇宙太靈の體現者として神國日本を肇め給ふたと言ふ尊き歷史的事實によるのであります。

矢内原博士は昨年九月の中央公論に於て

正義は國家の製造したる原理でなくして、反對に正義が國家をして存在せしむる根本原理である。

と說いて居るが、實に卓上空論の甚しきものであります。人間は正義によりて生み出されるのでなくして、產まんとする產靈の力によりて生み出されることは明なことである。國家の成立も人間の生れ出るのと同一の原理によるのであります。永遠に產み、永遠に生き、永遠に彌榮へんとする太靈の神意が國家を成立させたのであります。正義の如きは國家と國民との、或は國家と國家との關係を調整する整理法則の觀念にすぎません。先づ正義ありて國家あるのでなく、先づ國家ありて正義があるのであります。尤も西洋には株式會社の如く多數人間の相談によりて成立し

た法人國家があります。斯る法人國家では、正義が國家を成立せしめた樣な觀を呈します。併し神國日本は法人國家でなくして、太靈の神意によりて生み出された人格國家であります。多數人の相談によりて成立した法人國家とは、全然其の本性を異にして居ります。斯る人格國家を法人國家と同一視して、正義を其の成立原理であると說くことは斷然間違ひであります。

又博士は

國家の理想は人民の增加、領土の擴大、資源の獲得等、物質的に考慮せらるべき事柄でない。……國家の理想は正義である。

と云つて、物質的繁榮を國家の理想でないと說いて居るが、是れ又空論であります永遠に生き、產み、彌榮え行かんとする太靈の神意は物質的繁榮を通じてのみ行はれるのであります。だから人民の增加、領土の擴大、資源の獲得等は、それだけでは國家の理想でありませんが、それが一多相卽の關係に於て統一される時には國家の理想となります。正義の如きは此の理想を達する爲めの行動規則にすぎぬもので國家を離れて、それ自身としては何の意味もないものであります。丁度それは人と

人との間に行はるゝ交際上の禮儀が人を離れて何の意味もないと同じであります。だから國家は永遠に產み、永遠に生き、永遠に彌榮え行くことを理想として步むので、決して正義を理想とするものではありません。

第二　萬世一系の天皇　天照皇大神の御延長なる萬世一系の天皇は神國日本の永久不動の御柱となりて之を統治し給ふのであります。天壤無窮の御神勅によりて肇められた神國日本は、萬世一系の天皇によりて永遠に搖がぬ眞姿として聳え立つて居ります。

萬世一系の天皇は權力によりて、或は國民の總意によりて神國日本の御柱とならせ給ふたのでなく、永遠に產み、生き、彌榮えんとする太靈の神意の體現者なる天照皇大神の御延長として、自然に神國日本の御柱とならせ給ふのであります。故に天皇は神聖にして絕對であらせ給ふのであります。吾等は自我の理知によりて天皇を神聖絕對と理解するのでなく、自我の理知を超越する靈覺によりて直感するのであります。

國家は永遠に產み、生き、彌榮えんとする神意によりて限りなく子孫を增殖しま

す。併し單に子孫を增殖するだけでは、太靈の神意に適ひません。神意に適ふ生命の眞姿は一多相卽の統一態であります。一は永遠の神意で、多は有限の個人＝國民であります。多の國民が一致團結して一の神意に奉仕する時、一多相卽の統一態が現はれます。日本では一は永遠の神意を體現し給ふ萬世一系の天皇であります。だから神國日本の眞姿は多の國民が一致團結して一なる萬世一系の天皇に奉仕する一多相卽の生命態であります。

第三　敬神崇祖の信仰　人間は祖先の靈の實在と其の守護とを靈覺する事により て敬神崇祖の信仰を抱く樣になります。此の信仰あるによりて、國民は祖先の遺した國家に對して强き愛着を抱き、一致團結して其發展の爲めに犧牲的奉仕を勤めるのであります。それで國民の奉公心は單に國家を自分のものと見る所有欲ばかりによるのでなくして、祖先の遺せる國、祖先の墳墓の在る國に愛着する敬神崇祖の信仰によりて呼び出されるのであります。若し所有欲だけで國を愛するのであるならそれよりも善き國があれば、元の國を捨てゝ善き國に移るでありませう。所がそうは行きません。國民は物質的利害を超越して、祖先の遺せる國、祖先の墳墓のある

國に愛着するので、之を捨てゝ他の國に移るに忍びないのであります。

祖靈の實在と其の守護とを信じ、其の遺業を承け繼ぎ、其の遺訓に循ひて生き行くべく努力する事は、永遠に彌榮えんとする太靈の神意を實現するのに絶對に必要であります。民族生命の未來は、祖先との靈的關係を離れては、決して正しき發展を遂げ得ないのであります。だから生命の神は此の靈的關係を保持せしむる爲めに人間に敬神崇祖の信仰を賦與したのであります。それで原始時代の人間は、悉く敬神崇祖の信仰を有つて居りました。併し此の信仰は自我の我儘な發展に伴れて、其の姿を隱すのであります。斯る理由によりて、世界の諸民族は悉く敬神崇祖の信仰を失つて居るのに、獨り日本人のみが之を持ち續けて居るのですが、それは何故でせうか。其の理由は次の通りであります。

第一の理由は他の民族は所々方々に漂泊する間に、色々な異民族と雜婚して家族生活を紊亂させたのに反して、日本民族は早くより日本國に定住し、數千年の間に家族生活を固め得たことであります。此の家族生活を固める爲めに、大なる力として作用したものは皇室の御家族であると信じます。皇室の御家族が萬世一系の天皇

を御宗主として組織整然として固つて居ります。皇室の御家族が斯うですから、大臣百官を初め、百姓に至るまで、全國民が之に倣つて家族生活を固めるわけであります。家族生活が固まつて居れば、其の祖先も判りますから、日本民族は天賦の敬神崇祖の信仰を持ち續け得るのであります。然るに異民族に於ては、國の定まらぬと家族生活の亂れて居る結果、祖先の誰であるか判らぬ樣になります。祖先を祭ることも出來ません。斯くして異民族は敬神崇祖の信仰を失つたのであります。

第二の理由は他の民族は敬神崇祖の信仰厚き統治者を有たなかつたのに反して、日本民族は數千年の間、敬神崇祖の御信仰厚き萬世一系の天皇を戴いて居た事であります。前にも申しました通り、萬世一系の日本天皇は天照皇大神の御延長として天津日嗣の高御座に登り給ひ、皇祖皇宗の御遺業を繼ぎ、皇祖皇宗の御遺訓に循ひ皇祖皇宗の御守護の下に、天下を知ろしめし給ふのであります。だから敬神崇祖の御信仰は日本天皇の國家御統治の宗源であります。此の意味は神武天皇の天神祭祀の御詔勅に於て特に明白であります。それは次の通りであります。

吾が皇祖の靈、天より降り鑒りて、朕が躬を光し助け給へり。今諸の虜已に平ぎ

海内事なし、以て天神を郊祀りて大孝を申ぶべし。

是れ千秋萬古、煌々として神國日本の政道を照す敬神崇祖の御教訓であります。歴代天皇は此の御聖訓に循ひて皇祖皇宗の神靈を祭り給ひました。元始祭、神嘗祭春季皇靈祭、秋季皇靈祭等々悉く天皇の厚き敬神崇祖の御信仰を昭示するものであります。天皇が此の通りであらせ給ふから、之を仰ぎ見る國民も之にならつて敬神崇祖の信仰を持ち續けたのであります。だから歴代天皇が敬神崇祖の御信仰を持ち續け給ふたと云ふ事は、國民をして此の信仰を持ち續けさせる最大の教化力となつて居るわけであります。然るに他の民族はどうですか。世界中、如何なる國民も斯の如き有り難い天皇を戴いて居るものはないではありませんか。先づ日本民族に最も能く似て居ると云ふ猶太民族を御覽なさい。昔、猶太の歴史中、最高の賢者と云はれるダビデ王が猶太國家を家族國家に建て直しました。王は此の家族國家を永遠に遺さんと思つて、臨終の枕頭に其の後繼者ソロモンを招きて、次の如き遺訓を與へました。

吾々家族以外の者に、ヘブライ人の統御を委すべからず。幾代の後までも、吾々

一家の者が首長たらざるべからず。

猶太民族の未來を思ふ明君の心中、察するに餘りあります。然るにソロモン王はどうですか。贅澤三昧の文化生活に耽りて國帑を浪費したのみならず、異敎徒の民族から妃を娶りて、敬神崇祖の信仰なきことを遺憾なく表示して居ります。其の結果、國内亂れて、王の死後間もなくダビデ王朝は亡びました。だから猶太民族は日本民族と同じ樣に家族主義を重んじ居ると云はれるけれど、生命の神意を實現する點に於ては、到底比較になりません。猶太民族でさへ斯うですから、其他の民族に至りては知れたものです。スターリンの如きは敬神崇祖の信仰を斥け、ロシヤの傳統精神と何の關係もなき共産主義を旗印にして、ロシヤ國民を統一しようとして居りますが、實に愚の至りであります。國民の傳統精神を無視しては、如何なる主義でも實現出來ません。スターリンが其の主義の遂行に行き詰つて居るのは當然のことであります。

之で神國日本の三大要素を說き了りました。そこで此の三要素を綜合して約說すれば、天皇は永遠に生き、永遠に產み、永遠に彌榮え行かんとする太靈の神意の體

現者であらせらるゝ天照皇大神の御延長として、敬神崇祖の御信仰を以て天壤無窮の皇運恢弘にいそしみ給ひ、國民は天照皇大神を共同の御祖先と仰ぐ大家族として敬神崇祖の信仰を以て、御宗主であらせらるゝ天皇の御事業を翼賛し奉るのであります。斯くして天皇を一とし、國民を多とする一多相卽の正しき生命態、卽ち神國日本の眞姿が成立するのであります。

十三　敬神崇祖の信仰と擧國一致

敬神崇祖の信仰は神國政道の宗源にして、日本精神の核心であります。之によりて日本國體の眞姿が顯現し、之によりて忠孝一本の道德が樹立し、之によりて擧國一致の團結が成就するのであります。實に敬神崇祖の信仰こそは神國日本に取りて最大重要の成立原理であります。されば明治維新の王政復古に際して、畏くも明治天皇には大敎宣揚と神靈鎭祭の御勅語を下して、敬神崇祖の信仰を億兆に宣布すべしとの御聖旨を昭示し給ひました。其の御勅語は次の通りであります。

大敎宣揚ノ御勅語

朕恭シク惟ミルニ、天神天祖、極ヲ立テ統ヲ垂レ、列聖相承ケ、之ヲ繼ギ之ヲ述

プ。祭政一致、億兆心ヲ同ジクシテ、治教上ニ明カニ、風俗下ニ美ハシ。而ルニ中世以降、時ニ汗隆有リ、道ニ顯晦有リ、治教ノ洽カザルヤ久シ。今ヤ天道循環シテ百度維レ新ナリ。宜シク治教ヲ明カニシ、以テ惟神ノ大道ヲ宣揚スベシ。因リテ新ニ宣教使ニ命ジ、以テ教ヲ天下ニ布カシム。汝群臣衆庶、其レ斯ノ旨ヲ體セヨ。

神靈鎮祭ノ御勅語

朕恭シク惟ミルニ、大祖創業シテ神明ヲ崇敬シ蒼生ヲ愛撫ス。祭政一致ノ由來スル所遠シ。朕寡弱ヲ以テ夙ニ聖緒ヲ承ケ、日夜悚惕シテ天職ノ或ハ虧ケンコトヲ懼る。乃チ祇テ天神地祇八神曁ヒ列皇ノ神靈ヲ神祇官ニ鎮祭シ、以テ孝敬ヲ申ブ。庶幾クハ億兆ヲシテ矜式スル所アラシメンコトヲ。

天皇が敬神崇祖の信仰宣布に就きて斯の如く御軫念を懸けさせ給ふのに、輔弼の任にある大官等が敬神崇祖の眞義と重大性とに理解を有たなかつた爲め、御聖旨に副ひ奉るべき何等の實績をも擧げ得ないで、唯西洋文化の思想を輸入する事ばかりに汲汲として居りました。其の結果、知能啓發を目的とする文部省は盛大なる發展を遂

げて居るのに、敬神崇祖の信仰を宣布する機關はいまだに設けられてありません。從つて國民の知識は駸々乎として進歩したけれど、敬神崇祖の信仰は日々衰退して今日に至つて居ります。それで教育程度の低い國民は一般に敬神崇祖の信仰を有つて居りますが、高等の教育を受けて、高等の知識を有つて居る程、無信仰となつて居ります。而して此の無信仰の知識人が個人主義、自由主義、共産主義等を說いて國民を迷はせる厄介者であります。敬神崇祖の信仰を宣布する機關の缺乏は、斯の如き憂慮すべき結果を齎して居ります。

今や非常時局に直面して、國民は一致團結して國難に當らねばならぬ秋となりました。政府は屢々聲明を發して擧國一致を國民に要望して居ります。此の點に就いて、何人も異存のある筈はないですが、唯私の常に奇異に感じて居ることは、之に關する近衛首相の內閣告諭(昭和十二年九月九日)、日比谷に於ける演說(昭和十二年九月十一日)、議會に於ける演說(昭和十三年一月二十二日)等を讀んで見ても、何處にも敬神崇祖の文字を見ざることであります。告諭の內には「尊嚴なる國體に基き」と說き、日比谷の演說には「日本國體の尊嚴無比なる歷史的組織に淵源す」と

說き、議會の演說には「犧牲を忍ぶことは正に我々が後代同胞に對する崇高なる義務である」と說いてあります。國體の宗源は敬神崇祖の信仰でめります。我々が犧牲を忍んで國難を克服することは後代同胞に對する義務であるばかりでなく、更に此の國を我々に遺し給へる皇祖皇宗に對する義務であります。だから首相の說かれた所を更に一歩進めれば敬神崇祖の信仰に歸着するのであります。首相がそこまで進んで說かれぬのは如何にも遺憾であります。實際に於て、敬神崇祖の信仰まで遡らなくては、眞の擧國一致は出來ぬのであります。高等教育を受けた知識人は別として、他の大多數の國民の心理は敬神崇祖の信仰を指導原理としなくては擧國一致を遂げ得ぬのであります。だから擧國一致を國民に要望しながら、其の根本原理として敬神崇祖の信仰を說かぬのは、甚しき缺點あると信じます。

右の理由によりて、私は速に敬神崇祖の信仰を宣揚する特別機關を設けて、明治天皇の御聖旨に應へ奉ると同時に、擧國一致の指導原理を國民に昭示されんことを、政府當局に要望するのであります。

附錄

日本我

一、個人我と種族我

人間には二つの我があります。個人我と種族我とであります。

個人我とは各人の自覺して居る普通の我であります。此の我は弱小な存在で、其の壽命は五十年、或は長くとも百年位に限られて居ります。其の認識は五官を通して物質世界の一小部分を知覺するにすぎません。靈の世界の如きは、毫頭微塵も認識することが出來ません。其の記憶は生れてから後の僅な經驗に限られて居ります。生れぬ前のことに就いては絕對に思ひ出すことが出來ません。其の活動は隨意筋を道具として、物理的法則の支配下に於て、外界物質に働き掛けるだけであります。隨意筋を使用せずに、單なる念力によりて、神通的に外界に働き掛けることは出來ません。個人我とは斯の如き衰れなものであります。

種族我は人間の自覺に現はれて來ない、隱れた存在であります。併しそれは人間の本體をなすもので、實に偉大にして神秘な存在であります。其の根元は宇宙の太靈皇產靈（みむすび）であります。皇產靈が永遠に生き、永遠に產み、永遠に彌榮えんとする神意を實現せんが爲めに、自身を分現して種族我となつたのであります。それで種族我は產靈（むすび）であります。又之を直靈（なほひ）、或は靈魂とも申します。其の壽命は無限です。次ぎから次ぎへと、限りなく個人我を產むことによりて、人間の種族を永遠に維持保存します。だから種族我と言ふのであります。其の認識は神通の靈覺と申して、物質の世界も靈の世界も悉く認識し得るのであります。其の記憶は無限の過去から現在に至るまで、一切の經驗を包容して居ります。其の活動は物理的法則を超越して神通であります。詳言すれば、念力によりて色々の物質現象を顯現するのであります。實に種族我は不思議なものです。斯る不思議な種族我が人間の本體となつて居るのであります。

二、個人我と種族我との關係

種族我は皇產靈の分現として、永遠に生き、永遠に產み、永遠に彌榮え行かんとす

る不滅の實在＝產靈であります。種族我は此の生意を實現せんが爲めに次ぎから次ぎへと限りなく身體を創造します。而して此の身體を維持保存する爲めの官能として個人我を產むのであります。それで個人我の官能は此の身體を外界に對して維持保存するに必要であるだけに限られて居ります。身體の維持保存には、先づ身體と外界との物理的關係を認識し、次ぎに其の認識に基いて外界の事物に働き掛けることが必要であります。個人我は身體と外界との物理的關係を認識する爲めに知覺を有し、外界の事物に働き掛ける爲めに隨意筋を使用して運動することが出來ます。個人我は此の知覺認識と隨意運動とによりて、身體を維持保存する役目を勤めて居ります。併し個人我の官能は唯それだけであります。それ以上の官能、卽ち神通認識や神通活動などは許されて居りません。物質世界に對して身體を維持保存する爲めに、神通の認識や活動は必要でないからであります。然るに種族我は產靈として生命を創造し行くのですから、其の目的を達するには、認識に於ても、活動に於ても神通でなくてはなりません。だから種族我の官能は凡て神通であります。佛敎では五通と言ふことを說きますが、これは種族我の官能であります。五通とは天眼

通、天耳通、他心通、宿命通、神足通のことであります。今此等に就いて一々說明する遑はないですから、唯本題と深き關係ある宿命通だけを簡單に說くことにします。

宿命通とは吾等の前世ー吾等が生れ出でぬ前の經驗を知ることであります。個人我は自分の生れてから後の短き經驗しか記憶しませんが、種族我は無限の過去世から現在に至るまで、無數の祖先を通して生き續けて來たのですから、此の過去世の經驗を一々記憶して居ります。それで種族我は個人我の生れぬ前の過去世の經驗を思ひ出し得るわけであります。それが宿命通であります。人間は坐禪の修行によりて個人我を超越すれば、宿命通を得るのであります。

斯樣に種族我は個人我の知らぬ前世の經驗を知つて居るので、兩者の關係は奇妙なものであります。個人我を惱ます病氣の內には、祖先の惡業から來る惡報によるものが多いです。然るに宿命通を有たぬ個人我は斯る因緣を知らぬから、「自分は別に惡いことも爲ないのに、なんで斯んなに不幸であらう」と世を恨み、果ては自暴自棄に陷ります。けれど種族我の宿命通から見れば、個人我の不幸は祖先の惡業による

惡報だと判ります。そこで此のことを個人我に說明して聞かせれば、個人我は之に對して次の如き抗議を申し立てます。

祖先と自分と、血は續いて居ても、個人として祖先は祖先、自分は自分、全く別個の存在である。それで祖先に惡業があれば、其の惡報を祖先自身が受くべきである。然るにそうでなくして、祖先の惡業の惡報を、祖先と全く別個の存在者たる自分が受けると言ふことは、全く道理に合はざる矛盾である。

右は一應尤な怨言であります。併し種族我から見ると、祖先と言ひ自分と言ふも、それは現象としての個人我の區別にすぎません。其の本體は終始一貫して變らざる種族我であります。それで惡業を行つた祖先と、惡報を受ける自分とは個人我としては別個であつても、本體として同一體であります。卽ち現在に於て自分の受けて居る不幸は、過去世に於ける自分自身の行つた惡業による惡報にすぎません。だから天を恨まず人を恨まず、自業自得と悔ひ改めて、より善き未來の生命を創造することを目的として、善業力行に精進せねばなりません。善因善果、惡因惡果と言ふことは、種族我の宿命通によりて認識されるのであります。

又、個人主義者は「自分は自分の爲めに生きる」と言つて、唯自分一個人の利益のみを眼中におき、國の爲めにも同胞の爲めにも、自分を犧牲にすることを顧みないのであります。是れ亦個人我あるを知りて、種族我あることを知らぬ結果であります。個人我の知覺によりて認識する限り、個人と個人とは利害關係によりて結び付くだけであります。だから個人は唯自分一身の利益を中心として一切を打算的に考へるより外はないのであります。併し種族我の宿命通から見ると、一切の同胞は共通の祖先に於て本質的に一致して居るのであります。個人我としては個々別々であつても、種族我として今も昔の通り、共同の祖先に於て一致して居るのであります。それで個人我は縱には祖先と靈的關係を保ち、横には同胞と靈的關係を保ち、一致團結して民族的生命の發展に奉仕すべきであります。それが個人我に課せられた使命であります。

三、敬神崇祖の信仰

然るに個人我はアダム、エバに於て見らるゝ如く、唯我獨尊の我性を發揮して、其の使命を無視し、自己本位の生活に墮せんとする强き傾向を有つて居ります。斯る

傾向を其の儘に放任する時は、民族生命は荒頽するばかりであります。それで種族我は個人我の我性を制御せんが爲めに、人間に敬神崇祖の信仰と言ふ靈的官能を賦與したのであります。個人我は此信仰に制御さるゝことによりて、初めて縱には祖先と靈的關係を保ち、横には同胞と靈的關係を保ちて、一致團結して民族的生命の發展に奉仕し得るのであります。敬神崇祖の信仰なくしては、民族の一致團結は到底望まれないのであります。

右の通りですから、如何なる民族も原始時代に於ては、敬神崇祖の信仰を有つて居りました。併し此の信仰は民族の經驗する歷史的事情によりて消長することを免れません。其の事情は中々複雜でありますが、差當り爰で力說したいと思ふのは、次の通りであります。

一、民族が共同祖先の誰であるかを確實に知つて居ること。

二、民族が共同祖先から直系の宗家に當る歷代君主によりて統治せられること。

三、民族が一定の領土を永久に持ち續けること。

四、君主が敬神崇祖の信仰厚きこと。

右の四事項は敬神崇祖の信仰を持續するのに缺くべからざる必要條件であります。民族が其の共同祖先の誰であるかを知らなかつたり、其の君主が外國から來た征服者であつたり、其の領土が一定の場所に定らなかつたり、其の君主が無信仰であつたりする樣では、敬神崇祖の信仰は自然と消滅するのであります。今や世界の諸民族が悉く敬神崇祖の信仰を失つて居るのに、唯獨り日本民族のみが之を持ち續けて居ると言ふのは、最善なる歷史的事情を具へて居る爲めであります。日本民族は數千年前の共同の御祖先を確實に知つて居ります。數千年の間、共同の御祖先から皇統連綿たる天皇の御統治を受けて居ります。數千年の間、同じ領土に住んで居ります。特に歷代天皇は厚き敬神崇祖の御信仰を以て御統治の根本原理となされました。祭政一致は神國政道の根本義であります。實に四事項とも揃ひも揃つて最善であります。斯る歷史的事情に惠まれ居るによりて、日本民族は神代以來數千年の間、敬神崇祖の信仰を持ち續けて今日に至つたのであります。

四、日本我と日本道德

敬神崇祖の信仰の持續は、卽ち種族我の生命創造の持續を意味します。それで日本

民族が神代以來、數千年の間、敬神崇祖の信仰を持ち續けて來たことは、卽ち日本民族の種族我が數千年間、民族生命を創造し續けたことを意味します。それで日本民族の種族我は數千年間に亘る生命創造の歷史を執藏して居ります。歷史は記錄として世に傳ふるものと限りません。種族我の生命創造の歷史は種族我其物の本質中は不滅の記錄として永久に傳はるのであります。而して此の生命創造の歷史は種族我の本質中に記錄さるゝことによりて、種族我に個性付けるのであります。皇產靈から分現したばかりの多數の產靈は平等のものであつたと想像されるけれど、已にそれ〳〵個々別々の方面に於て、無限の年代を通して個々別々の民族的生命を創造して來た以上、個々別々の種族我は個々別々の創造の歷史を執藏することによりて、個々別々の個性を具ふる樣になります。それで日本民族の種族我は日本民族獨自の創造歷史を執藏することによりて、日本民族獨自の個性を具へて居ります。それで私は之を日本我と名つけて居ります。

日本我は知覺超越の世界に隱れて居るのですから、日本人は日本我を具へて居りながら、それを知らずに居ります。特に太平無事の世に、生活の爲めに生業を營んで居

る時には、唯個人我が働き居るばかりで、日本我は奥深い心の底に無爲の眠りを貪つて居ります。だから太平無事の世が永く續くと、國民は享樂主義の文化に耽りて文弱の風に流れるのであります。けれど日本民族の生命を脅す樣な危急存亡の國難が起つて來ると、日本我は猛然蹶起して個人我を叱咤するのであります。此の叱咤の叫びは嚴肅なる神の聲となりて、個人我の上に天降り來るのであります。此の日本我の特性を明徵にする爲め、之をカントの說く實踐理性と比較して見ませう。

カントの倫理說によると、可想世界に實踐理性と言ふ道德意志がありて、

汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥當し得るように行動せよ

（何人にも妥當し得る普遍的原理によりて行動せよ）

と言ふ無上命令を人間に與へるのであります。可想世界とは在ると考へられるけれど直接に認識出來ぬ世界と言ふことで、詰り私の說く知覺超越の世界であります。實踐理性とは種族我に相當します。それが知覺超越の可想世界から無上命令を下すと言ふのであります。其の邊は私の說く所と能く一致して居ります。併しカントは道德法の命令者を種族我と言はずして、實踐理性と言つた所に、私の說くとの大な

る相異を示して居ります。私の說く種族我は個人我を產む產靈で、歷史を有し、民族的個性を具へて居ります。此の種族我が道德法の命令者でありますから、結局道德法とは民族的生命を通して、宇宙太靈の神意を實現する爲めの行動にすぎません。然るにカントの說く實踐理性は個人我を產まず、歷史を有せず、民族的個性を具へざる、純粹なる理性にすぎません。從つて其の命令する道德法は民族的生命と無關係なる純粹なる行動法にすぎません。併し斯の如き理性や道德法は單なる哲學の概念としては存在するけれど、實際問題に對して道德的に行動せんとする實際人に對して何の役にも立たぬ空想にすぎません。其の理は日支事變に就いて見ればすぐ判ります。日本兵は天皇の御爲め、同胞の爲め、暴支を膺懲することを正しいと信じて居るから、不惜身命の勇を振つて戰ふのであります。之を正しいと信ぜしめるものは民族的個性を具へた種族我、卽ち日本我であります。若し日本兵に斯る日本我が無く、日本民族の生命と沒交涉なる普遍的理性によりて、何人にも妥當する普遍的原理にによりて行動せよ、と命令されたとしたら、日本兵はどんなことをすれば宜いのでせうか。日本人にも、支那人にも、英國人にも、ロシア人にも共通する普遍的原理と

は、一體どんな原理でせうか。そんな原理があつたとした所で、それは單なる概念としてカントの心中に存在するだけで、實際的に實行出來ぬものであると信じます。カントは實踐理性を人間の生命と沒交渉なるものと考へるから、斯んなことになるであります。カントによれば、人間の生衝動と沒交渉でなくては、實踐理性は道德的善意志たることを得ないのであります。それでカントの道德法は到底人間に行はぬれものと信じます。併し假令行はれなくとも、道德法は道德法として眞理であると、カントが言つて居ります。とても、吾等には信ずることの出來ない奇異な道德法であります。凡て卓上思索に耽る哲學者は、實際に生きて居る實際人を離れて、高遠な所に眞理を求める癖を有するものですが、カントも此の癖に囚はれて居るのであります。

更に道德法の命令者としての種族我と實踐理性との權威に如何なる相異あるかを檢討して見る必要があります。カントの說によると、個人個人はそれ〴〵個々別々の實踐理性を具へて居ります。百の個人があれば、百の理性があるわけです。而して百の理性は孰れもそれ自身の爲めに存在し、それ自身の爲めに活動するものであり

ます。換言すれば自己目的の存在者であります。人は斯る理性を具ふるによりて人格と名づけられます。それでカントは人格に就いて、次の如き道德法を立てゝ居ります。

人格を目的として取扱ひ、手段として取扱はぬ樣に行動せよ。

之を云ひ換へると、次の通りになります。

人間を自己目的の人格として尊敬せよ。決して他の何物かの手段に使用してはならぬ。

斯樣に自己目的として權威ある人格が集りて國家を作る時、其の國家はどんなものでせうか。斯る國家に於ては、其の國民は各自自分の人格を重んずると同時に、他の人々の人格を重んずると言ふ正義が行はれるのであります。併し人格は凡て自主獨立ですから、之に使命を課し、奉仕を命する樣な統制的原理はないのであります唯多數の人格が正義の約束によりて集合して居るだけであります。全くデモクラシーの法人國家であります。

然るに產靈主義の日本に於ては、多數の種族我は共同一致して太靈皇產靈の神意實

現に奉仕すべき使命を負はされて居ります。種族我は自己目的の爲めに存在するのでなく、皇產靈の神意實現の爲めに存在して居るのであります。併し皇產靈は隱身（かくりみ）の神ですから、知覺することが出來ません。それが現象の世界に現人神として體現し給ひて、天照皇大神及び其の御延長たる萬世一系の天皇と成りまし給ひました。それで長い歷史によりて個性付けられた多數の種族我＝日本我は天照皇大神並に萬世一系の天皇を皇產靈の御體現と仰ぎ奉り、一致團結して天壤無窮の皇運恢弘＝皇產靈の神意實現に奉仕して居るのであります。多數の日本我は正義によりて集合して居るのでなく、皇產靈の御體現者たる天皇によりて統一されて居るのであります。だから神國日本はデモクラシーの法人國家でなくして、皇產靈によりて產み出された人格國家であります。

昭和十三年二月五日印刷
昭和十三年二月十日發行

版權所有

【定價 金二十錢】

著述者　大阪市外箕面村櫻井　福來友吉
發行兼編輯者　大阪市北區曾根崎上四丁目一九　吉田賢一
印刷者　大阪市東區北久寶寺町一丁目四三　福井範通
印刷所　大阪市東區北久寶寺町一丁目四三　精華堂印刷所　電話船場一〇二五番
發行所　大阪市外箕面村櫻井　產靈（むすび）協會　電話櫻井四三番

終